107
3
125

明治十九年十月二十五日内務省許可

賢婦常子春雨日記序

自個廣く學ひ無て年來多くの牌史小説を讀て一日も倦まと無し然せお家の騒動ものより隨筆滑稽者と人情本に至るまで貸本屋の文庫を渉獵まと紙屑拾ひの芥に臨み乞食の襟を反して虱を見ると一班おりとい些穢ない比喩あれ共ツと北性の事なり故に書も爲ぬに管城子を友とし斯も有ふかとポッ〳〵編て是古人の糟粕にて別段に新奇の趣向い無と物好の書肆來て梓に上すもの毎年數十部の多きに至る豈赤面至極の事せ止なん〳〵とて筆を投ぜること數十回奈にせん終に商ふの難いことをと流石に大息して机に倚折節日吉堂より使来ば〳〵來つて督促火攻よりも甚たしく差當つて旨い分別も出ざれ深くも考へす只思ふ由をスラ〳〵と書て遞興て曰く此書世に公けにせ、ば必ら非常の聲價を得て板元の福利を得ん事大丈夫請合おる可し宜しくヤしてお呉と云爾

干時明治十九年菊月下旬

夢の家主人述

中野義雄

節婦常子
妻おきぬ
石井國保畫

特11
144

○春雨日記

第一回

笹啼や春の初音も此邊ト東都名所の一つゐて紳士の別莊豪家の寮軒を並べし根岸の里今い其名も金杉村と野暮ゐ村名ゑ更れども變らぬ色の幾返り五行の松は片邊柳水の生垣結圍し利久好みの家造り俗と離れし風雅の本色富て奢らぬ藪茸家根戸主い誰とも白梅の莉端ゑ繁る一樹内ぞ床しき女子の聲音讀む小說い曲亭翁ゞ世ゑ名高き名譽の著作夢想兵衛胡蝶物語の後編煩惱鄉の冐頭書(上略)痛ましいかゐ一切衆生い八万四千の塵勞煩惱遂に苦海ゑ沈みてい井戸へ墮せし簪同樣あがらんとすれど浮む瀨ゐし世尊こを憐をみてその煩惱の根だやしせんと八万四千の法門を設けて折伏對治ゐり玄かれども三千世界二度ゑい手が廻りたまへて煩惱鄉を漏されたり」と讀む其聲い黃鶯の谷の戸出て囀づる如く折から老女の聲としてオー嫁女太儀〳〵此母の氣を慰さめんと讀で聞せる其女の赤心まだ甲夜ありと思ひの外今打つ鐘い十一時四方の人も寢た樣子其許

もモウ寢たごのよい。イエ〳〵貴女のお好ゐ徹夜讀も厭ませねどお倦ゐなつたらお肩で先柔ませうと手に持つ小說を下ゑ措き母が背後へ廻りつゝ軟弱き手首さし伸て揉む力へ嫋竹の細き腕も孝行ゑ重く堪ゆる母の背にホロリと落を一ト雫母い夫と心付きヨソ嫁女其許い何を泣ゐさるオー聞ゐた此母が優しくして呉る心ゑ甘へ老の癖とて畫切ゐさにト半分言せ也聲濕ませ。勿体ゐい事被仰りませ假令何も貴女ゑ仕ゆるが嫁の役ゐんで辛く思ひませう殊ゑ此身い浮標よひしを三百圓といふ大金をお出ゐされて身受され由緒正しき御家の婦人ゐれて下さきし海より深く山より高き御恩を爭で報せんと心と込て朝夕に仕へまつれど如何ゑせん足らいぬ勝の不束者お氣ゑ入ふぬことわらばお叱りゐされて下さりませ今しも思いづ泣ました涙だの種いお踪蹟の絶て分らぬ旦那樣ト言いせも敢也機嫌を損ト。又たしても悴ごのことかモウ宜加減に斷念たゞよい貞孝全たき其許の樣な良妻を持乍ら法圖のゐい彼が放蕩不孝ゐ子程可愛と子故迷ふ煩惱い恰度其許

が今讀だ八万四千の塵勞煩惱羈と成し恩愛も良人よ忌れ捨られて倦ぬ別をに袖絞る涙の雨も皆煩惱この斷がたき煩惱を切て捨たる此母ごの苦しき心を酌取て其許も倶よ斷念よ二度と再たび此家へ足踏させぬ積なりト口にい言ど恩愛の羈お引かるゝ親子の情猛く見ねても流石い婦女しゞたゝく眼よ溢るゝ涙笑よまぎらす母の顔打覗りつゝ嫁い尙。其若旦那のお放蕩も足らいぬこの身がお側よ居て御機嫌の取樣が惡ひもろ其不束とお叱るく御實子の若旦那を勸當おされて此身とゞ實子の如くお愛しゑ勿休過て恐ろしく思ふよ付ても若旦那が御改心おさをたあらどうぞお許しおさをてと本夫と母と身一つに思ひい二つ搔口說く嫁と姑の中睦まじき世よも稀おる義姑節婦开も此二個い如何おる者ぞ回と重ねて說分べし

第二回

話說す幕府盛の頃小川町通りに邸宅を搆へ御小納戸役を勤し川上晋十郎と言る麾下おり文の道よい暗けをど武勇衆よ勝れ鬼神をも怖ぬ猛者よして品行正しき人おりしが此人にして此病ゆり常に大酒を好みて醉ば行ひ荒々しく妻い良人の酒癖の良ふぬとを苦よ病て夫が爲め世を早くし遺念の娘と殘したり名を常子と呼び其心狀父よ似て幼少より武藝を好み嘉永二年十三歲の春より神田お玉ヶ池の劍客千葉周作の門に入り武藝に琢磨の功と積み僅三四年間に上達して免許以上の腕前とあり同門の子弟い言も更あり師の周作も舌と捲て驚嘆する計おれど去りとて常子い婦女の道よ欠たる所少しもあく裁縫の業い素より琴三味線の調べ挿花茶の湯等の遊藝よも暗からす又其風姿の艶麗なる小町衣通も斯やとばかり猛く見へても自かゝ優しき腕よ傾國の媚と含める愛嬌腦現よ絶世の美人おれゞ我手折んと胸を焦し思と寄るも多かる中に同じ千葉の門下にして出羽庄内の城主と聞へし酒井左衛門尉の藩士渡邊右内の次男健三郎（その時十九）及び幕府の麾下よて駿河臺よ住み高三千石を領する水野何某の長男平馬（二十四）の二人深く常子よ懸想おし折よ觸を事に托つけ思の丈を筆よ言せ或い直接に袖褄ひき左右よりかき口說ど男勝りの常子なれゞ未定めおき浮草の浮たる戀路よ爭でか靡かん去とて明白よ班

しめもんも有撃ゐて柳ゑ風と受流し体よくあしらひ居たりしに二人いいと〳〵焦思く我こそ戀の魁けして一番鎗の功名を讓らじやらじと狂ひ出す片思なる煩惱の心の駒ゑ鞭うちて或日師匠の周作い某太守ゑ招かをて稽古休の折もよし常にい竹刀の音忙しき道場さへに寂然と平馬健三郎の両士のみ遠慮の者もわらざれど是幸ひと水野平馬い健三郎ゑ打對ひ。我戀人常子殿ゑ足下も心を掛ふるゝい素振にて推量せしかど常子殿ゑい斯云ふ平馬ゑ深き思の有磯海足下ゞ横戀慕せらるゝも忍猶豫せらるゝ事あれゞ叶はぬ戀と斷念て兄弟子の拙者に常子殿を讓りたまへト言せも敢ず健三郎い膝立直し。イヤ常子殿い拙者奴ゐ十分心いあるあれど足下ご妨碍せらるゝ故未だ打解たまいぬゑ日頃い兄弟子あれゞとて戀ゑ上下の隔あし足下こそ斷念れよト言放る詞ゑ堰立平馬。飽までしぶとき自惚根性拙者こそ刀ゐ掛け美事手ゑ入おん眼ゑ掛ん其時耻覥かゝをるな。ヤア舌長きその一言命を目的に我妻と思ひ込ざるアノ常子いかで足下に得られんや。然らは常子を賭物とし足下と我と命の取遣。果合とい面白しイザ來られよと傍の大刀右手ゑ引付け膝突つけて疾視たり此方も怯まぬ武士の意地優らぬ劣らぬ双方の身搆ぎり〳〵と詰寄たる後の説は次回ゑ讓る

第三回

登下平馬い詞を正し。今爰ゑて足下と我と命の取遣あす時い此道場を鮮血ゑ汚し師に對して辭ごたし就てい上野の摺鉢山を果合の場所ど定め明日の夜九ッの鐘を暗号に同所に會する不破名古屋此儀い什麼にと言せも敢ずいよ〳〵堰立つ健三郎。此場ゑ至りて卑去ゑも其期ど延して逃支度去とい笑止千萬ど言ゑ平馬い冷笑ひ。足下ゞ心ゑ比較べ期を延せしとて逃ると思ふか足下ごの撃か撃るゝか二人い一人ゑ傷つく喧嘩その側杖ゑ師の道場を騒ごせんこと思ひも寄らず此場い一旦迭の胸ゑ。納まりかねて拔掛し白刃を鞘ゐ納めても納まりかぬる戀の鞘當。當りて碎くる武士の意地然ば明日の夜九ッの。かねて覺の我本事。开い我よりお見せ申さん。イヤ拙者より振舞申さん。先夫まで い平馬ど。の渡邊氏。足下の首い足下の胴へ。互に預て物別を。去らばゞかり右

左其日いそのまゝ別をしゞの翌をゞ嘉永六年三月十六日晝い觀櫻の人足繁くいとい賑はふ花の上野彌生の天も小夜更て月い朧なれども朦朧たる花曇りの雲ゑ掩いれて足元暗き摺鉢山人跡絶て寂寥たる折こそよけれと双方の身構さらり〳〵と拔放つ夏尙寒き氷の刃戀の闇夜ゑ閃めく刃鋒迭ゑ激しく聲を合し一上一下と撃太刀の音も暇なき生死の際退ゞ附入り開けゞ閉つ優を劣らぬ手練の迅業丁々發矢と斬結ぶ折かゝ傍ゑ高く聳へし櫻の老樹の下影より顯はを出る怪〻の妖怪必死とありて斫結ぶ白刃の中へ跳り入りスックと立たる異形の裝束只見を怪髮いおどろに亂し眼の光鏡の如く額ゑ二本の角と生じ隆き鼻逆立つ眉毛口い耳まで裂たるゞ炎の如き舌を吐き麟形の衣服を纏ひ現ゑ恐ろしき兜体魔相平の維持ゑ挫ひしゞれし鬼女の面影を摸し道成寺の演劇でする班女の顏もかくやとゞかり此時雲間を洩出る葉越の月の青ざめたる鬼女の面ゑ反射なし尙物凄さを添たるに二士ゞびくり斬結ぶ刃を引て飛退り逃足出して山を下り逃んと焦る後姿を件の鬼女い打詠め。お両士とも暫らくゝ呼留られて再度びつくり开も此鬼女い鬼か

人か次回を讀で知たまへ

第四回

件の鬼女い冠りたる般若の面と取除つゝ莞爾笑ふて立たる形況雲間を洩ておぼろげに照す葉越の月影に艶ろきあがら振かへり逃んとしたる水野渡邊慄なく足と踏ゞてよく〳〵見をゞ箇い什麼に二人ゞ命を賭物に戀焦れたる常子なれゞ是いとばかり呆れ惑ひ詞齊しく云るやう。命と的の血戰も足下ゑ迷ふ武士の意氣地生死と爭うふ白刃の中へ戯ふれらしき其裝束可惜膽も冷したりトいふ顏見結て笑を含み。お両士とも心を靜め妾ゞ云事よく聞れよ妾ゞ異形の裝束せしい足下等二人の血戰を留る爲めの計策躍の温ゑ用ゐたる道成寺の衣裝をそのまゝかりに般若と見掛て足下等二人の剛膽を試て見たに思ひきや其正体を能も見認を刃を引て逃たまふ武士ゑ似氣ゐき臆病未練且又武士と云ものい國の爲君の爲千軍萬馬の修羅闘場に戰死ゐすこそ本意あらめ千萬金ゑも換難き大切な命と婦人の爲ゑ輕んじたまふい愚の至かゝる放呆き貴君方に肌身を任す

妾あらねど箇程迄に思しめす切あるお心よ絆されて色よいお返事したけれど桃と櫻のお二方何れを何れと定め兼ねゝ今改めてお二方にお渡し申す般若の面此心を解當たまひし男郎の方へ靡きませうト言つゝ手よ持つ般若の面二人ゞの前へ投出し。武士ゞの一旦拔た刀血を見ずして元の鞘に納める譯にも行ますまいイザ此面と二つ割各々お持歸ふれて篤とお勘考あそゝせと言ゝて二人い異議よ及ぜず提げし白刃を取直し般若の面をまッ二つ各々懷中よ之を納め月い伽をどもはの暗き戀の暗路を辿りつゝ立去る二人の後影見送る常子い豫てより傍の木影よ待せ置たる一人の家僕を呼寄て鬼女の衣裝と風呂敷に包てやをら脊負せつ我家をさして歸り行く斯て平馬い面の謎を解當んと三日三夜我部屋よのみ閉籠り種々よ考へたをど能き案じも出ざるにゞ思按なげ首窮すをゝ濫すと云る小人の戀路に迷ふ頑固よ獨熟々思ふやう健三郎い日來より文學よさへ富たをゝ定て面の謎々も解て結ゝる戀人の常子と契を重ぬるおらん斯る節より弟門下の彼奴に常子ととらをてい男の意氣地ゞ立難し惘然あがらも人知をず健三奴を聲果し然し

て後よ兎も角も思慮あさんと淺墓にも覺悟決めし平馬の察しに違ふことなく健三郎ゞの首尾よく面の謎々を解當ざるや當ざるや將亦この後の頭話い什麼よ次回を讀て知ねかし

第五回

單表渡邊健三郎い常子ゞの掛たる心の謎首尾よく解當て平馬奴を出拔くれんと同じく家よ垂籠て三日三夜工風を凝し漸やくにして悟り得しか思按よ組たる腕を解きハタと打たる膝頭溜息吐てひとり言嗚呼過まちぬ過まてり謎の心を解得て見をゝ今更よ面目あし曩の夜平馬と生死を爭そふ果合のその場所ゐて常子ゞの異形の形裝よ恐をおのゝき逃去るを呼止らをて臆病と戒しめられた其上よ今又般若の面よよそへ掛たる心の深き謎淺き心ゐやう〳〵と悟をば實よ是やその濁世煩惱色欲界その故如何よといふ時い磐若の文字い梵語よて悟道を進むる意味とか聞き今その般若の木の面と武士の魂ひ同樣なる刀を以て二ッよ割しいとりも直さゞ色欲界の煩惱の羈と斷しも同樣また人世に絶て

あらざる般若の姿にいでたちしい外面如菩薩内心如夜叉と釋迦が敎えと眼前悟らしめたる常子の頓智迷ひの夢の覺て悔しき實よあるまじき擧動あり過にし事は悔るもおよばじ是より降魔の利劍を捨て身を佛門に委ねんと活然として決心せしゞ去るとても常子どのに漸やくにして悟り得し誠の心と告ずしてこのまゝ別をんも口惜し責て一筆書送ふんと右等の由を細々と筆よ言して一封の書狀と認ため下僕わ持せ常子方へと送り々る平馬いかくともしふ露の血氣よ迅る無分別とても角ても戀の仇健三郎を擊果し我思ひを遂んとて執念く質いる迷ひの雲日に〳〵健三郎ゞ藩邸ある神田橋内の酒井邸の四方を徘徊おして居たりしに或夜健三郎の下僕ゞの狀箱と携さへて通用門より出るを見認め擊取る手掛を得たりと喜び下僕を賺して種々〳〵と健三郎の樣子と問ゞ下僕い答へて。若旦那い先頃より御病氣よて垂こめてのみ在すをゞ實い貴郎も御存じの通り常子どのへの戀煩らいと言ゞ平馬い打笑ひ。シテ今時分何處へのお使。其常子どのへ若旦那より。ソリヤ健三郎より常子の許へ。何やら艶めくこの手紙ドリヤ一走りト言捨て口善

惡なくも喇づりつ彼方をさして急ぎゆく偖いと平馬い下僕の跡を白眼ゞの如く見送りて何か心に點頭あがら思按も道も引換て八世洲河岸の方へと立去ける

第六回

話頭一轉て健三郎い常子ゞの掛たる般若の面の謎の心を解當て深く心よ愧つゝも活然として悟を開き世を捨て高野へ登ふんと武者修行の爲め六十餘州を遍歷したき旨を述べ父右内より三年間の暇を乞しに右内もまた武者修行と聞き敢て止めもまだ部屋住の健三郎ゞへ主君よ言上するよも及ゞす翌日い幸はひ吉日あり善い急げの譬もゆをゞ明るを俟て發途せよと父母の許しに歡こぶ健三母い脚半よ笠の紐よと我子ゞの初旅の準備つ苟且なゞふ三年間の別と思へば何とあく名殘としさの女親進まぬ心を勵まして甲斐〳〵しくも旅の支度を殘る隈あくして.呉る父と母との顏色を見るに付てもせき上る涙よ絞る袖袂慈愛の深き父母を浮世と俱よふり捨て一婦の爲よ佛門よ入しと殘よ聞たまい〻嘸やお嘆きあさるべし通れぬ不孝の罪科と只お宥しと願ふのみと言よ言をぬ此場

の仕義クヽるべしとも知らざる右内母のお里も諸共に早く孫磨の功を積み天晴武術の達人と成り上りて歸る日を屈指かぞへて待ますると迭代りの教訓慈愛春の夜早明そめて曙はの告る雞の聲名殘い盡じィザ去ふばお両親とも隨分御無事で其許も健固でと親子互ゑ別れの一句去らばとばかり言捨て立出る健三見送る両親心殘して此年來住も馴ゑし藩邸を漸くゑして立山つ振臍みをば父母の恩高さゞの上に彌高きまだ明やらぬ中天に輝やく星を載だきて八代洲河岸の堀端へと來掛る折しも後より誰とい知らぎ駈寄て閃めき渡る劍の電光咄嗟と驚ろき振顧る健三郎の肩先を破羅淋寸と斬付たり

第七回

斬れながらも健三郎少しも怯ず聲あらゝげ。何奴おをば卑怯ゑも詞も掛ずと言せもあハず。驚ろきたまうお平馬あり過ゑし夜上野の果合ゑて足下の命を貰いんとせしを戀人常子ゑ支へらを遠廻しある心の謎解も無益な武士の意地刃ゑ掛ての戀爭そい女々しき業の謎々を解より迅き平馬の太刀筋受らるゝあら受て見よと聞て健三い平馬ゑ對

ひ。汗ハ短慮あり水野氏常子ハ足下の暗意あるべし我等ハ謎の極意を悟り。サア其極意を悟りしからハ生して置れぬ夫故わ。殺さんとする足下の覺悟ハ現に大ある誤解なりと言ども聞ぬ平馬の怒。ヤア卑怯あり健三郎事に托へて此場所を逃んとするとも逃さんやト又斬付る無法の太刀風深疵あがらも健三郎怒の面色朱を沃ぎ餘りと言ハ無法千万假令深疵ハ負たりとも手を束ねて擊とんやト引拔く刀を杖として蹌跟く足元踏去めつ漸やくよして起立り二擊三擊斬結ぶ一進一退死生の前心ハ矢竹に惱ども最初の深疵よ健三郎擊太刀亂れて後の方へ巡巡く處ろを附入る平馬横に薙たる太刀鋭どく腰の番を丁と斬る斬られて健三と横様に堂と倒るゝ汗ゞの上よ乘し蒐つて致死の一刀柄も貫をと刺んとするを跳返しつゝ上ある平馬を下よ組布き死物狂乃逆手に平馬の胸板苦嗟と貫ぬく下よりも突出す刃に咽喉を刺をて苦と叫びもわへを双方急所を貫ぬき合ひ今擊とありて息絶たり兎角する内夜も明ければ通行する者ありて二人の死骸を見認め最寄の辻番所へ訴たへしかば夫々取調べの上姓名も悉しく解りたをハ親元へ引渡さ

をしを双方の親元も涙ながらに引取つ内濟の示談盤のひて事故なく濟しとぞ（記者曰す両人が親達ゞの我子の横死を遂しを悲しみの段死體取片付等種々の騷ありたをど繁雑しけれハ略さて記さ是より又常子ゞの身の上よ就て一條の物語あり次回を讀て知たまへ

第八回

山寺の春の夕暮來てみをハ入相の鐘よ花ど散ける。東叡山の春景色黄昏告る鐘の音に人も櫻もちり〳〵に家路をさして歸る中に花見る人の長刀ひけらかしつゝ両個の武士いたく酒よ酔たるゞ櫻の枝と手折來て明樽とハ括し付け肩よ擔げて千鳥足人品よき一人の娘を中よ挾んで左右の手を取り戯ふれあゞら歩み來る娘ハ怖さ恐ろしさどうぞお宥しなされてと言ども聞ぬ件の武士酒臭き頬を摺つけ或ハ首筋よかちり付あど見るに得堪ぬ魂体を娘ハ愧て捕られたる腕をやつと振拂ひ。此處までお送りヤしたれハモウ能加減よお宥し下され左樣あらばト言捨て行んとすると一人の武士ドッコイ遣らぬと

引止る其手を拂ふ手錬の手刀擊れて苦と痛さに堪ずや聲荒らげて詈しるやう。その美しい顔として今の手際とコリヤ如何だと呆るゝ両士の顔を見娘い片頬ゑ笑を含み痛くいお止あされをとお免しなされて下さりませと言せもわへを堰立つ両士女達ゑ無禮る舉動さう强情を張からと可愛さ餘つて憎さゞ百陪呼吸の根止てくれんをと怒ゑ任せて威の爲きらり〳〵と引拔く大刀白刃ゑ動せぬ件の娘飛掛るよと見間ゑ難く白刃を打落し一士ゞ腰疼飛せべ蹌跟乍らに不忍の池へ氷入と眞轉倒醉醒の氷十分に喰はせられ懲もせを落たる白刃を拾ひ取り又斬掛る一人の腕を肩まで捻上つ此にお懲遊べせと口數利す徐々と跡をも見をして立去ける弁も此娘と誰とかする亦那川上常子也此日朋友の娘連と上野へ花見ゑ行たるに前なる武士の手込に逢をさ〳〵難儀ゑ及びしを常子い連の娘達を先へ返して只一人二個の武士ゑ誘引れ池の端まで來りし時いくふ詫ても免さねべ余義なく彼等を懲せしなり又此武士い薩藩の宮坂運次永井秀熊と云る者ゑて秀熊いやう〳〵と池の中より這上り運次と顔を見合せて跡を追べき氣勢もあく芝三田の

藩邸へ這々の体あて逃歸り深く耻て他言せを心ゑ秘て居たりしとゞ箇い是安政元年春三月の事ゑして常子ゞ十九の時ありしゞ此一條より常子ゞ身ゑ不思議の奇禍を惹起す悪しき咄しい例の次回

第九回

却つて說く宮坂永井の両士い痛く常子ゑ懲されて芝三田の藩邸ゑ逃歸り深く耻て他言せを心ゑ秘て居たりしゞ隱れたるより顯いるゝはあくいづしか一藩の評判とあり武士を研く隼人の國風皆爪彈して両士を黜け一婦の爲ゑ挫しがれ嗚呼〳〵逃て歸るとい言ふ樣なき臆病未練此儘ゑ捨置てい他藩の嘲笑を受け鹿兒島一藩の瑕瑾なりとて頓て両士と本國へ逐歸し詰腹を切らせしとゞ當時下谷和泉橋通に道場を搆へ千葉周作と互角の勢ひを張る一刀流の劍客伊庭軍平と云るあり或日稽古休ゑて七八名の門弟等道場ゑ集り各自武藝の自慢話し中ある一人ゞ衆ゑ向ひ千葉周作の門下ゑい恐るゝ者一人もあけれど只心憎さい川上の娘常子ゑり彼此程池の端にて薩藩の武士と二人まで手球に取

て投退し女よ稀なる力量迅技適晴美事の手際ありと市中一般の大評判それにひき換へ伊庭の門下ゐいみゐ腰拔ばかりありと世間の人の口の端よかゝる風評もありとかきゝぬ遺憾至極の事あらずやと席を打いて敦圍ゞ傍かゝ一人ぞ進み出で然い去ながら常子女い假令鬼神を挫ひしく神變不思議の術ありとも高の知たる婦人の假非業折がゐあゝゞ雌雄と滅し彼よ巴の勇あらば我又義盛の才智を以て只一掴よ生捕て妾にせんと思へども未だ其機よ出逢ぬを日來遺憾よ思ふなりと鼻搖めかす大言を聞流しつゝ又一人ぞ末座よ扣し戸倉宇佐美と屹と見顧り詞を正し足下い常子に不覺を取り夫ぞ爲め詰腹切ふれた彼永山氏とい同藩ならずや殊よ苦樂を共にせんと義兄弟の紀を結びし親しき中と豫て聞く然るに義兄永山氏の死すると餘所よ見流しつ常子を擊て義兄の爲め仇を報もる御所存なさや點念てござるいハゝァ聞ゐた足下い常子よ臆せしゐ足下の如き臆病武士ぞ伊庭の門下にあればこそ我儕い言に及ゞす先生までの面汚し明日より千葉の門よ入り常子の屁でもお臭めされと異口同音よ喇けられ活と堰立つ血氣の宇佐美何條常

子よ臆すべき各自方の御助言あくとも朋友の仇讎擊果さんと豫ての覺悟今より向き十日を期し常子の生首を持來り各自方のお目よ掛んと放言る詞と聞く人々夫でこそ眞の武士併し今演られた足下の詞ゐ違ゐく常子の生首拜見せし時今の過言いお詫ゆさんと堅く約してその日い其儘右と左よ別れし後宇佐美い常子ゑ擊取るや否次回よ於て說分べし

第十回

戸倉宇佐美い同門の甲乙等に煽動され漫よ惴りて十日の間に常子の生首携さへ來り各自方よ見せ申さんと詞を契へて別しが女子でこそあれ彼常子は力量迅業衆よ秀れ迎も尋常の勝負よてい及びゞたしと思ふにぞ折を窺がひ人去れず暗擊よせんものと卑怯よも思ひ定め常子の他出と覗ゞひ居たりかゝる仇のありぞとも絶て去らざる川上常子い宵に武藝のみゐらず琴三味線手踊等の遊藝まで其師よ就て習ひ覺ゐ雄々しき業を爲といへど心狀正しくて女子の道ゐ欠たる事あく朋友さへも多かる中よ麹町山本町よ住む

舞踏の師匠坂東秀次といへる者とい姉妹の如く交とり厚く殊に年齢といひ顔貌まで他人の空似か瓜二つ割らでそのまゝ生寫し知らざる者い眞實の姉妹ありと思ふもありとか柴下休題その年の霜月下旬常子ご父晋十郎の役頭小日向水道町の平岡何某方にて長男某ご誕生日の祝宴を開くに付き親類縁者い言も更あり親しき人々を呼集へ酒席よ花を添るため夥多の藝人を招き寄せ落語手踊品玉遣各々得意の藝を演し飲つ喫ひつ深更るまで笑ひ動搖めく愉快の酒宴客も主人も興よ入り夜の更るをもしらざりけり此夜常子も父と倶に平岡方へ招かをしご父晋十郎い親類中よ少しく陪る事ありてろの招きに應せを常子のみ席よ連ありをさ〳〵興を添て在り此事早くも窺がひ知りたる戸倉宇佐美い勇み立ち時機來れりと宵の間より平岡の屋敷外を其處此處と徘徊し内の様子と窺ごのふものから是といふ便を得ざれば心頻よ焦立のみ佇立あがら夜を更し傳隨院の鐘の聲屈指見ればはや亥の刻酒宴も稍果しと覺しく内の騒ぎも鎮まりておひ〳〵歸る來客の内よ紛れて同家の門より出る女の後影頭巾眼深よ冠りしも忍ぶ顔い定に去れざれど衣裝い兼て見覺ある縞縮緬の二枚重先よ立たる一僕ご振照し行く提灯の紋の覺の三つ柏イデ一擊と遣過し水道端い適宜の場所と先へ廻りて一僕ご照す提灯切落し返す刀と取り直し永山の仇思ひ知れと踏込て擊つ必死の刀鋒肩より脊筋へ大袈裟よ斬れてウンと倒るゝ上へ踏跨ごりて致命の一刀柄も徹れと刺貫ぬく急所の痛手に堪るべきさしも剛氣の女丈夫も不意と擊れて哀むべし刀下の鬼と消失しい惜ても尚餘あり

第十一回

斬付らをて倒れし時冠りし頭巾の取たるに打しも雲間を洩出る亥中の月に仇の顔よく〳〵見れい箇い什麼に常子にいあらざりけり驚き呆るゝ戸倉宇三美南無三寶と血刀を拭ふて鞘よ納ても納まり兼る胸の中才智過れし常子ゆへ我の機密と察せしか彼ご智謀あかゝる間違今更悔るも奈麻與美の甲斐あき思按をなさんより三十六計逃るに手あしと思ひ返して又疊る閨夜よ紛きて電光の閃めく如く逃失々り事の起源を尋るに此夜常子い隙てより姉妹の如く交情深き彼の坂東秀次を誘ふて平岡方の招きに應じ舞踏の一

手よ酒宴の興をおさ〳〵添て居たりしが秀次と母が病氣也へ一歩お先へ歸りたく跡の處いよいやうふと頼むを聞て點頭く常子ホンに母さんが待てゝあろう私よ構とず少しも迅ふ併し亥刻よも程近し何事もあるまいぞ私の家僕をお連あさい幸いひ提灯もあるまいかふト常よ變ゝぬ常子の親切自分ご家僕よ心得させ送り屆ける用意をなし此塞れのにお前まで途中で風邪でもひいてはあちぬ不躰なごち私の羽織此衣類を着てをいでと持て來りし着換の衣類ハイ有難ふ明日お屋敷へお屆け申します貴君誠に御苦勞ですト人を外さぬ秀次の愛敬下男よまでも禮を述べ打連立て平岡方と出しと常子と間違へちを暗々宇佐美ゐ撃れし秀次の不幸い常子の幸ひ世い塞翁の馬ありけり」恁て常子い此變事と秀次の供よ遣はしたる下男の急報よ始めて聞知り急ぎ現場へ馳付て其筋へ訴へしかゞ其夜の中に撿死も濟み涙あごちに秀次の死骸と山本町ある同人の家よ引取り秀次の母よ右の次第を告たるに病を常ある母の歎き娘ご死體を見るとそのまゝ一時よ差込む癪よ閉られ果敢なく鬼籍ゐ入たるより常子い有よも有れぬ思ひ責てもの思ひ出

に自から進んで施主よ立ち秀次母子の野邊の送といと立派よ營あみつ該夜秀次と送ふせたる下僕よ樣子を尋ねしに彼曲者い永山の仇思ひ知れと名乘掛たと聞よりも諸い我爲に切腹せしと聞く彼の薩藩の永山ご知己朋友の誰人か此身を仇と覗ふあるべく人違ゐて他の女を殺せしとの殘念さよ執念く擊んとあすなるべし其機よ乘じ我もまた其曲者を誘き寄せ秀次の仇を報せんと胸ゐ浮びし一工夫信願の筋ありて夜よ〳〵神田明神へ參詣あすと盲觸せしに宇佐美は迅くも聞出し謀らるゝとい霜しらぜ今度こそい日來の本望只一擊と試夜に紛れ神田明神の境内なる立木の影に潜き居て常子の來るを待掛たり

第十二回

詣來る常子の後より拔擊に斬んとする肱を止むる拳法の奥妙難なく宇佐美を取て押へ膝下に組布き動かせず柳に齊しき細腰も宇佐美の爲にい大磐石跳返さんと揺悶ぎも更にその甲斐ゐらざりける常子い靜に言るやう何の御藩士か知らざれど妾を仇とし覗ひ

たまふい察する所永山氏に縁故のお方と覺えたり襲の夜妾と間違へて水道端にて踊の師匠坂東秀次を殺害せしい足下の所爲に違ひ有まじ永山氏の爲仇を報はんとおら武士い武士の作法あり何故尋常に名乘掛て勝負を其場に決したまはぬ殊に永山氏い女と侮り無禮の擧動ありたる上不覺を取しい身かゝ出た刄の錆と成果しも自ら釀せる罪にして怨るゝ覺嘗てあし然るを是非の思慮もなく執念く妾と擊んとおら妾も亦秀次の仇怨い此方に在ものを足子を擊で置べきかイザお名乘遊せと言つゝ膝下に踏布たる宇佐美をやとら引起せバ愧て頭と擡げ得ぜ稍やつて常下に向ひ恐入たる貴女の教訓迷の雲も晴て又名乘も今更面目なけれど拙者い戸倉宇佐美とて彼永山とい交り深き竹馬の友にて候ふなり貴女と間違へ秀次とやらを殺害せしも我ごの誤まり生兵法大疵の基礎とありし我ごの不運怨は晴つ常子ごの我首刎て秀次とやらの仇を報じたまへかしと覺悟決めし有樣に常子も詞を和らげて斯くお心の解し上い爭で足下を擊るべき妾も怨い晴ましたし併し今のお話しでは妾の首と得玉いぜい足下の武士ごの立ますまい夫にい妾の片袖と持

歸りて御傍輩にい昨夜云々の所にて常子に出會ひ斬掛しに彼い忽ち怯れを取り一刀の下に命と乞ふにぞ殺すも無益と命代に彼の片袖を持歸りしと僞りて告たまいゞ足下の顏も立といふもの女の入ぬ武藝もゑ妾い恥と思ひ侍ふぜと言れて宇佐美い尙愧らひ義あり信あるそのお詞御親切い難有けれど爭で去る僻事の出來べきぞ死すべき時に死せざれバ死に增る恥ありとか我も聊さか廉恥を知る切腹おして相果ん憚りおごふ常子どの介措頼むと落たる刀を拾ひ上つゝ我腹へ突立んとする其手と止め迅りたまふお戸倉どの死い易く生は難し左ほどに思ひ詰たまいゝ腹に換て髻を浮世と共に切捨て佛門に入り秀次の爲め且は永山氏の爲に跡ねんごろに弔らひたまへと道理責たる說諭の詞に漸やく服せし戸倉宇佐美常子に別れて其場より圓項黑衣に姿を變へ父母の許へば手狀を以て右の由を言送り身の暇を告やりてさして行衞も定めおく飄然として立去ぬ渡邊健三郎は般若の面の謎々に悟を開いて煩惱を斷ち高野へ登らんとして果さぜ終に非業の刀に死し死を決したる戸倉宇佐美い却つて佛門に入を得しも其事相似て其實同じ

からず奇中の奇と言まくのみ

第十三回

單表宇佐美の父戸倉甚五右衛門い此程より悴宇佐美ごの家に在る日と稀にしていつも夜更て歸宅なし以前に變る身の行爲不審さとのみあれど若年者の癖として惡き友に誘引出され遊里などに入込むなふん折もあらバ異見せバやと思ひ居たるに家出せしまゝ四五日過ても歸宅せざるに今はゝや捨おきごのたしと自から伊庭の道場へ行き傍輩弟子の甲乙に問合せしに此程は絶て稽古にも來らずといふ扨も不審と思ふものから他に心當もなければ焦立のみにてせん術なきまゝ又二三日打過しに家出ゑてより十日目の夕方飛脚ごの投込む一封の書狀は正しく悴の手跡途中よりと認るも氣遣はしく封じ目とく〳〵讀下せば永山ごの自殺の始末より傍輩弟子に敎峻され常子を奪んとて秀次を殺し明神の境内にて常子に出會ひ敎戒されし始終と委しく認ため武士の一分立ざるに耻ぢ高野に登りて出家を遂る志願ありとあるに驚愕心の中に歎ぜるやう永山ごの死い武士に似

氣なく婦女に對して無禮の擧動却つて耻を招きし上切腹せしい自業自得その永山ごの非と受繼ぎ執念く常子を擊んとして却つて彼に詫伏ふれ弓矢を捨て佛門に入りし悴宇佐美ごの腕甲斐あき狂人走つて不狂人も俱に走るの擧動なり世の嘲笑も後身影く子の罪い親の罪生て耻を晒さんより潔よく死するに如かずと決心し妻い世と早うして家にい一僕あるのみあれば心易しと事に托へ彼の一僕にい金若干と與へて身の暇を取らせ切腹あして相果たり素より此由しる者あく遺書さへもあふざれば甚五左衛門い最愛の悴の家出と苦に病で恩愛の絆斷とりたく夫ごの爲め發狂して自殺したるならんと言囃され其家遂に斷絶せしはいと淺ましき事ありと見る人眉を顰め聞人唇と齷ごのへせり程經て常子ごの地風評を人の話しに聞傳へ吾儕いかなる罪障ありてや自から手い下さねど渡邊水野い吾儕と慕ふ戀爭ひより刃傷に及び永山宮坂い切腹し又秀次い吾儕ごの身代に非業の最期を遂たるより引續いて其母も果敢あく消し夢の跡戸倉宇佐美も我ごの非を悟り死を決したるも漸やく宵め今どあつてい其父に自殺を促ごす媒介とありたる事の悔しさよ

數ふれば此身の上より罪あき七人の命を縮めしいと罪深きとにして頓て此身に廻り來る輪回の科ど恐ろしゝと雄々しき心も挫けつゝ責て亡人々の菩提の爲め佛の道に入ばやと姿い變ねど心の内浮世を思ひきり髪の尼とあつたる積にて一間の内に引籠り太刀に代たる珠數の緒の爪繰るより外他事もあし斯てその年も暮れ安政も二年とあり早いつしかに花散て若葉色增す青山邊に杜鵑も啼過て淋しき庭に桐一葉涼風そよぐ秋立て冬十月二日の夜天地も崩るゝ大地震に際し常子の働らき如何あふん

第十四回

古今未曾有の大地震に常子の父晋十郎い素より剛氣の猛者あれば少しも周章ず裏口より戸外へ出んと身を起す那時遽く此時速しメリ〳〵倒と落掛る梁に壓をて哀をむべし果敢なく其場に死でけり此時常子い例の如く我部屋に垂籠て觀念の外なかりしにいと凄ましき物音して天地も崩るゝ計りなれば扨い地震と知よりも雨戸蹴放し庭面へ身と跳らして逃を出しか父の身の上心許あしと傾ふき掛たる家の内へ辛くして潛り入り彼

方此方探せど影だに見ゑぬ兎角するうち行燈の倒をしより火起り焔々として燃上る炎に焦され烟に卷れ漸やくにして父の居間まで至りて見をば淺間しや目も當られぬ壓死の体に尋常の女子なりせバ氣も失せ魂しひも消へきに元より雄々しき常子なをバかゝる天災の其中にも更に動せず梁を彼方へ押除て父の死骸と引起腰帶とく〳〵脊に負ひ十字にしかと結び付け準備の懐劍閃かし出口〳〵を切開き炎と脫きて元の庭へ出たる時の働らきい目覺しくも又勇ましゝと聞者驚嘆したりしとぞ恁て晉十郎死去の後親類緣者い言も更なり組頭等打集て川上の家名を繼續せんと常子に聟と勸むをぞ思ふ仔細のあをバとて堅く拒みて從ごのゝぞ因て晉十郎の甥ある幕府の家人但馬集之助の二男幾之助と下谷二長町の青木助右衞門の長女お筆の男女と夫婦養子とし家祿も以前の如く養父晉十郎の職役に就き家名相續なさしめたる後の話い次回に說べし

第十五回

當時駿河臺に邸を搆へお側御用と勤ひる中野遠江守といへる人あり時の將軍の寵を

得て飛鳥おとす威權あるより其家隨がつて富榮へ桂と焚き玉と炊ぐ驕奢の舉動あるものから不義非法の所爲おく人を知るの才高く一見して其人の賢愚を知るとの評判に違ずず出入りの藝人も多かる中に有名の落語家桂文治（現今の文治ごの父ゐり）の弟子に文好といへる者或日師匠文治と供に同邸へ招かれし時文治い豫て儲けある高座に登つて落話央腹の工合やゐしかりけん頻に小便ごの出さくゐり堪へ兼て疎相したと後に居た文好ごの早くも悟りて文治の傍から湯呑茶碗に湯を注ぐ爲してわざと湯呑を倒し是い鳩相を致しましたと狼狽なごら手拭もて湯と供に掃除してそこらを体よく繕ろい師匠の罪と我身に衣四下繕ろふ文好ごの頓智を早くも見て取る中野彼い中々の才人ゐりと心の中に嘆賞し幾程もおく周旋して御本丸の奥坊主に取立しとそ又或夜邸宅の窓下と通る按摩を呼込み療治をさせたるに醫術に巧ゐるを知りお匕醫に取立やりしゐゞ世の耳目を驚ろかす種々の行爲ある中にも中野い常に汚なき着物を着賤しき人の業をして夜ゐ〳〵市街と忍び歩き下民れ情と探らんと辻君まで買たる人なりといふ中野い年三十八

に至るまでもまだ妻と娶らぬ縁談と勧むる人ある時い志士い頭を失ふと忘をず斯る場合に至りて絆となる妻子い嘗て用なしと朝夕酒を嗜むけみ他に樂しみいなかりしが常子ごの雄々しき風評を聞き我妻とあふんもけ常子け外にあるべからぬと彼頻政あらあくに見ぬ懇に焦かれて引ぞ煩らふ中野け風情を夫と見て取る親類ゞ人を以て常子方へ縁談を言入しに月下氷人け爲業にや一たび佛門に歸依したる常子も中野け人と爲りと聞て嬉しく忽まちに承知け旨を答へしかバ縁談順に整れふて安政三年十一月婚姻れ式目出たく終りぬ此時常子は二十一歳それ翌年男子と舉け秀雄と名けて愛くしみ養育るうちに昨日今日流るゝ光陰に淀みあく春け花秋け紅葉と樹梢け色と染換て秀雄ごの十歳といふ慶應二年け始より幕府け權威次第に衰ろへ十四代將軍家茂長州征伐として江戸城を進發け供奉に加いる中野け出陣妻け常子ごの別に臨み涙一滴目に持ぢ本夫と鳳ます其樣い給樣に讓りて次回よ説べし

第十六回

去程ゐ徳川十四代の將軍家茂い長州征伐として江戸城と進發し西京に滯在中時疫よ犯さをて果取ゐく夢去ゐりしかバ隨從の一橋中納言宗家と繼き程ゐく將軍の宣下あり是と十五代の將軍慶喜とす當時勤王佐幕の両黨ます〳〵盛んに軋轢し遂よ伏見の戰爭起り常子の本夫中野遠江守も此日の戰爭よ花々しき軍して遂ゐ戰死なしたりとの急報江戸の留守宅へ達せしも常子い豫て出陣のこの時よりも戰死と思ひ定めし事よしなれバ今更嘆き悲まず只良人の亡跡といと懇切よ弔ひつ今ぞ仇ある遺念の一子秀雄を養育る外他事も無憂ごの中よも經つ月日いつしか明治元年と世はあゞ玉の王政復古幕府恩顧の人々い或い奥羽に戰死し或は農商に歸するあり又い靜岡へ移住あすあり思ひ〳〵に離散なす中よ常子と領地ある常陸の土浦よ退居して又四五年と過すうち廢藩置縣の令を布れ續て家祿奉還の令出しを以て恩賜の金と此年來貯いへ有る金圓と合せて公債證書を買込み一子秀雄も追々よ成人なさバ出京あし善師と撰びて修業させんと去明治八年中再たび出京あし下谷金杉村ゐ然るべき賣家のありしを地面と共に買求め母子も

ろとも移り住み秀雄にハ師を撰びて漢洋の學を修めさせしに秀雄も頗ぶる勉強しかひ〳〵に上達あせしゞ若き書生の常として或夜朋に誘ハをてよし原へ浮を込み大門這入バ仲の街右へ折つて江戸一の大文字樓へ押登り逢洲といふを歌娼として一夜の春を買たりしが過世定まる縁よや互よ憎からぎ思ひ初め鶏も啼じ鐘も聞ぬ里の仇をとまで契りを重ね夫ゞ爲め多くの金を遣ひ棄て家よとてハ居付ぬを常子ハ深く心配し夫程思ひ合た中あれバいつその事よ根引して秀雄の嫁よしてやらんと子故に迷ふ粋な親人を頼みて逢洲の身の上を探らせしよ是も同じく幕府の旗下神崎與左衛門の娘にて本名をお絹と呼び父與左衛門ハ奥羽へ脱走し數度の戰爭に腰を打れ歩行不自由の癈人にあり維新後ハ四ッ谷佐門町に詫住居傘張を職業とし母のおいやと親子三人辛くも浮世を送り居たり

第十七回

お絹ゞ年十二の秋母のお早ハ苛目の病に罹りて果敢あくあり跡に殘りし癈人の父與左

衛門の手助して海人ゞ鹽焚くからき世を兎も角もして送るうち明治九年も春過て稍暖氣にありしころ父與左衛門ハ肺病を煩らひ日毎よ重る難症と孝心深きお絹の看病貧苦の中にて甲斐〳〵ゝく父の病氣を癒さんと程遠からぬお岩稲荷へ父の命に代らせたまへと祈る誠の通じてや或日お絹ハ例の如くお岩稲荷へ參詣ゝ百度を踏で居る處を是も同じく參詣の善女と覺しき立派ゝ年増ゞお絹の舉動に篤と眼を注け娘盛の年齢にて憂身を窶す神信心失禮おかち見受た處ろ由ゆるお方の成の果か苦からずハお身の上とトいと親切に問るゝまゝ〳〵お絹ハ我身の概略を詞短かに話すを聞き彼の年増ハ感心あしんとゝ哀や増たりけん是と賊に少ですゞの是にて何ぞ父様のお好お物でも調のへて隨分共に御看病必らず孝行と怠たり玉ふなと取ぬといふと無理よ押付け中ハ幾干か去ら紙よ包みて渡す情の恩賜名前も告ずに立去けるお絹ハ嬉しさ飛立つバかり夢路を辿る心地して急ぎ我家へ立歸り病伏す父よ有し次第と洩らさず告て包紙を披いて中を改むれバ壹圓紙幣で數五枚かゝる大枚のお金までお惠投下さる恩人のお名前も聞るんだハ

嬉しまぎれに忘れし落度悔しき事をしてけりと父子互に顔見合せ後悔話しのその折か
ゝ門の戸ごゝりと引明て入來る差配の田口平藏かくと見るよりお絹い走出で是い大屋
様ようお入來といふ顔じろりと盃取眼イヤあんまりよくも來ぬ相變らずの店賃催促親
父が病氣との言譯もモウさん〳〵聞倦た例もお前に泣付をるので佛心の平藏もべん
〳〵だら〳〵待て遣を八ケ月よて九圓足らぎの滯金質なら流る月なれど店賃と流され
ぬ今日は是非とも方を付て貰いねば外の店子へ對しても差配の義務が立ませぬ金ごの無
きゞ翌日限り店を明て貰ひませうと慈悲も情も荒々しく疊叩いて罵る聲病たる父よ聞
せじと氣兼苦勞に起たり坐たり其お立腹い御尤なれど今茲を店立されましては私しい
兎もあれ病たる父まで路頭に迷ふ果敢ない身の上どうぞ今少しの内と半分言せぎます
〳〵追込みイヤ今日い何あつても待ませぬト眼よ角立て威丈高苦り切たる手詰の催促
お絹い何と言譯も泣より外の事をおき胸の當惑思ひやるべし

第十八回

差配い倘も膝すりよせ今戸外よて側聞おせば見ぎ知らぎの人に五圓といふ金を貰つた
とゝ些細な金なら兎も角も往來中で知らぬ人よ故おく大金と貰つてい後の祟ごの面倒も
ゑ其筋へ訴たへねばあらぬ筈もしその惠んだ人が出おい時いとんだ嫌疑を蒙りて迷惑
よおるかもしれぎ底い差配の役目だけどうとも埒を明てやる代り其五圓と滯はつた店
賃の内へ納めておきお否おら今も言た通り店立喰すごの夫てもよいか二つに一つの返詞
をしろと理も非も分らぬ無法の差配苛酷い仕方と思へぎも素直お氣質の親と子ごの雨露
を凌ぎし店賃と思へば流石爭そひかね會々見たる紙幣の顔歡こぶ間さへおく〳〵も差
出す紙幣の數と改ため是丈受取ても四圓足らぎの不足わり違からぬ内皆濟おされば飽
こと知らぬ强慾の熊鷹眼に紙幣ひつ掴み我家をさして戻りもく狹き裏家の路次傳ひ下
氷の踏板ふみ辷らし小溝の中へ片足踏込み摺むく孺を撫りながら聲怒らして獨ぎ咈々
こんお危險い落し穴の明て居るのを長屋の衆ナぜこの差配に告ぬのだ撫むいた孺い愈
ぎも去やうごの買たばかぎの駒下駄と洗ひ立の白足袋もこを此通ぎ泥にした此損毛い誰

ゞ儲のふ馬鹿〳〵しいと怒鳴立をバお絹が隣家に大工職の増田與市といふものあり一抔機嫌で走り出でモシ差配さんその損毛い自業自得と嘲弄されて眼と怒らせ何ご自業自得でござると藥鑵頭に立つ湯氣れ燃るが如く罵しるを與市いわざと落付てサア其落し穴の樣あ大あ穴ご明たのも此間の霖雨に溝板ご腐敗たもへ長屋の行事から貴君の所へ度々洟届け申しても地主ご何だの家作人ご の斯だのと其儘に捨おいて自分ご其穴へ落たのだから底で自業自得と言たさのと理の當然に遣込られ黄蘗と甜たる啞の如く顔をしかめて行く跡を心地よげに見送るをりから女房のお咲も出來りお咲いそのまゝ隣家あるお絹の家を音信て今日いお親父さんの御病氣いどうだへハイ難有う厶 りますぞうも永引バかりて敢果〳〵しく行ません

第十九回

お咲は上り口に腰うち掛け夫い嘸お困りだらうれ親父さんの病氣も永引といへばどあんに店賃ご長引たとて今壁越に聞て居れゞ凸凹差配ご因業あ催促折角何處でかお貰ひ

ゞ償のふ馬鹿〳〵しいと怒鳴立をゞお絹が隣家に大工職の増田與市といふものあり一抔機嫌で走り出でモシ差配さんその損毛ハ自業自得と嘲弄されて眼と怒らせ何ぞ自業自得でござると藥鑵頭に立つ湯氣ハ燃るが如く罵しるを與市ハわざと落付てサア其落し穴の樣な大な穴ぞの明たのも此間の霧雨に溝板ぞの腐敗たもへ長屋の行事から貴君の所へ度々沙届け申しても地主ぞ何だの家作人ぞの斯だのと其儘に捨おいて自分ぞの其穴へ落たのだから底で自業自得と言たさのと理の當然に遣込られ黄蘗と甜たる啞の如く顔をしかめて行く跡を心地よげに見送るをりから女房のお咲も出來りお咲ハそのまゝ隣家あるお絹の家を音信て今日ハお親父さんの御病氣ハどうだへハイ難有う厶ります どうも永引ゞかりて敢果〳〵しく行ません

第十九回

お咲は上り口に腰うち掛け夫ハ嘸お困りだらうれ親父さんの病氣も永引といへばどあんに店賃ぞの長引たとて今壁越に聞て居れゞ凸凹差配ぞの因業お催促折角何處でかお貰ひ

欠

MISSING

四十五

第二十回

斯てあるべきにあらざるに與市夫婦を始め長家一同の助力に依り其翌日父與左衛門の棺を送り出し香花院なる芝西應寺町の禪宗西應寺へ葬埋り果て跡懇切に弔らひ居る是より先中野秀雄い逢州の許に通ひ詰め深く契りを重ねつゝ笑ふて辛き晝よりしてい月日の駒の遲きを悲しみ泣て嬉しき夜半よりしてはくだかけの聲まだきを恨み問夫い勤の鬱晴し今日も秀雄い逢洲の坐敷に長き居連の折から告越す與左衛門の死去の計報に逢洲の歎きを思ふて懇切に慰さめし上七十五圓の金と與へて埋葬の入費を助くる男の親切その眞實にほだされてまそ〳〵深く鳴海潟水洩さじと契りし中と聞知る常子い意外の喜悅長男秀雄を誘のかしたい狐に齊しき傾城と思ひ掛おき稀ある孝女思ひ出せば先つ年お岩稲荷へ參詣せし時憂身を窶す一人の小娘其身の命を縮めても父の病を癒さんと健氣な舉動に哀を催ほし五圓の金を惠みやりしが其小娘の名も偖らお絹とやら言しと覺も夫かあらぬか逢た上もしその娘であらんにい母い娘に金を惠み悴い親の死去に臨

み埋葬の代を與へしとい過世定まる縁にこそ爰に物を思いんより逢て仔細と聞こそよけれど思慮頓に決りしかば腕車と傭て吉原なる大文字樓へと急がせ行く此日秀雄も相變らず雨も降ぬに流連して逢州の坐敷に遊びをりしが折から駈來る新造お糸忙々しげに障子を明けモシ花妓へ婦人のお客がお前いんに是非逢たいと尋ねて來たもの彼方へ通しておきましたト言に逢洲い合點行かぬ女客とい誰あらんと襠衣姿の玄とやかに客間へ入て顔見合せハッと計に差俯き左右の詞もあらざるを夫と察して常子い差寄り思ふに違いぬお絹どのいつぞや四ッ谷のお岩稲荷で一度お目に掛つたのち序もあらばお尋ね申さうと思つたのみにて打絶しが近頃人の風評に聞ば親御のために苦海に沈み痛く苦勞をあさるとやゝ何を隱さう卑妾いお前が二世と契りたる秀雄の母の常子といふものト聞てぴつくり耻らふ逢洲常子い尙も摺寄て如何なる事をや言出る例の次回を見て知りぬ

第二十一回

恁て常子い逢洲のお絹よ對ひ詞を和らげ私ゝ秀雄の母、ありとい其許も知らずに過せしあふんが逢て話をして見れゞ苟且あふぬ什昔知已殊よ其許の素性をも聞て優しき心掛思ひ合た中あれい此母ご身受して長男秀雄の嫁となし死水取て貰ふ積老の世話をゞ賴みますと世よ打解たる粹ゐ言葉よ夢かと心かりお絹の喜悅常子いやゞて樓主よ掛合ひ逢洲の身代金三百圓餘を償ひて翌日い根岸の本宅へ引取る程に夫々支度をしゐさいと後の事まで細々と吩咐置て歸宅あしぬ去程よ逢洲い常子ご粹ゐ計らひよ苦海を脫て秀雄の妻と成上りたる身の出世素より思ひ思いをし夫婦が中の交情深く取分てお絹は思あり義ある姑常子を主の如く敬まふて能く孝養を尽しつゝ良人秀雄よも能仕へしかゞ家内よ一つの苦說なく爰に光陰を過るうちお絹が亡父與左衛門の一週年忌ふ當りし際姑常子の計らひとして以前お絹ご世話よありし四谷佐門町の同長屋の人達よ厚く報酬となしつゝも取分け與市夫婦よい米を贈り金と與へ其日常子いお絹をゞいと花美に粧り立て同伴立て與市方へ禮よ來りし樣を見て長屋の人々も肝を潰しお絹ご斯く出世したも親孝行の餘慶ありと見る人聞く人語り合ひ羨やまぬ者あかりしとぞ

附言

お絹親子を苦しめたる彼差配人の田口平藏い去十五年の六月中コレラ病に罹りて死去し妻のお村三女のお作(五年)へも傳染し親子三人枕を併て七日間よ死果たり

ヒ、ニ話說秀雄い一たび浮氣の水の染込みしか當座ゞかりい睦しかりしが妻のお絹ご其以前廓に在しに事變り折目正しく仕へると結句心よ忌嫌ひ又も心の狂出て昨年の春頃より再たび花街よ入浸り稻本樓の稻葉よ順染み内を外ある放蕩の以前に彌增し烈しけれどお絹い更よ悠氣の色なく影よあり日向になり氣兼とあしつ幾度ゝ異見をしても糠よ釘うつて變つた良人の品行常子も遂よ立腹しかゝる性根の腐つた長男は最早家へい寄附ぬと勘當同樣放逐せしをお絹は悲しく又辛く良人の心の外たのも妻の私ごの取る揖の不束もゑト嫁姑中睦ましく暮すうちにもお絹は母の機嫌よき折を窺ごひ良人の爲よ詫つ詫ふをわびしき光陰を昨日と過ぎ今日と暮すその有樣い第一回よ委しく綴りし如

くあるご秀雄も近頃先非を悔ひ親類等の執成にて漸く常子を宥めつゝ親子夫婦ご元の鞘へ再たび圓く治まつたい本年三月の下旬ありとぞ

春雨日記畢

明治十九年九月二日飜刻御屆
同　十九年十月　日出版

定價五十錢

原板人　鈴木德輔
飜刻兼
出板人　日吉堂　菅谷與吉
神田南神保町四番地

發

横山町三丁目　辻岡文助
榻町四丁目　鶴聲社
馬喰町二丁目　山口藤兵衛
南鍋町　兎屋誠
通四丁目　内藤茂
本材木町　自由閣
両國藥研堀　鈴木喜右衛門
馬喰町三丁目　木屋宗次郎
南傳馬町一丁目　春陽堂
本石町二丁目　上田屋榮三郎
淺草三好町　大川屋錠吉
下谷東黒門町　木村已之吉

兌

日吉堂出板書目次

伊東專三編輯
開明奇談 寫眞仇討 全壹冊 定價七十錢

假名垣魯文閲 久保田彦作編輯
鳥追阿松海上新話 全壹冊 定價五十錢

繪入實錄 柳澤女太平記 全壹冊 定價二拾五錢

繪入實錄 小栗判官美勇傳 全壹冊 定價三拾錢

繪入實錄 四天王鬼賊退治實傳 全壹冊定價三拾五錢

邯鄲諸國物語 全壹冊 定價四拾五錢

三莊太夫實記 全壹冊 定價七拾錢

今常磐布施物語 全壹冊 定價三拾五錢

繪本太閤記 全壹冊 定價二十錢

繪本楠公三代記 全壹冊 定價二十錢

繪本眞田三代記 全壹冊 定價二十錢

繪本大坂太平記 全壹冊 定價二十錢

繪本曾我物語 全壹冊 定價二十錢

繪本爲朝一代記 全壹冊 定價二十錢

繪本大日本智勇鏡 全壹冊 定價二十錢

繪本德川十五代記 全壹冊 定價二十錢

加藤清正一代記 全壹冊 定價二十錢

繪本小學勉强鑑 全壹冊 定價二十錢

091283-000-7

特11-144

春雨日記 (賢婦常子)

夢の屋主人／述

M19

DBN-2142